"Eurafricans in Western Africa -Commerce, Social Status, Gender, and Religious Observance from the Sixteenth to the Eighteenth Century" : 143～147. 2005

書　評

George E. Brooks, "Eurafricans in Western Africa -Commerce, Social Status, Gender, and Religious Observance from the Sixteenth to the Eighteenth Century", Ohio University Press, 2003, 335ページ.

齋藤　俊輔

アフリカに対する印象は、《植民地支配》、《内乱》、《貧困》、あるいはいまだ《未開》といったところに収まるのではないだろうか。もちろん、《未開》以外の《植民地支配》や《内乱》…が歴史的に存在し、現在も存続しているのも事実である。しかしながら、誤った認識を持ったままであることも少なくない。そのひとつに、歴史的経緯に関する思い込みがある。典型的な例を挙げれば、ヨーロッパ勢力が、《大航海時代》と呼ばれる時代からすでにアフリカやアジアを植民地化していたというものである。

本書は純粋な研究書であるが、やはりこうした思い込みを払拭するには最適の良書である。研究の対象は、西アフリカ、とくに現在のセネガル、ギニア＝ビザウ、ギニア、シエラ＝レオネ（以下、本稿においてこれらの地域を西アフリカと表記する）等の海岸を中心に活動したユーラフリカン（ポルトガル＝アフリカ人、フランス＝アフリカ人、アングロ＝アフリカ人）の16世紀から18世紀の三世紀にも及ぶ歴史である。これらの国は、20世紀半ばまで、フランス、ポルトガル、イギリスに植民地化されていた経緯をもつ。それゆえ、すでに述べたような思い込みが、依然として残っている。しかし、本書を通読していくうちに、ヨーロッパ勢力が現地勢力と妥協しながら、というより彼らは現地社会に取り込まれながら、18世紀まで交易を存続していたことがわかってくる。ポルトガル、オランダ、フランス、ついでイギリスが西アフリカに進出しながらも、決していわゆる大虐殺を伴なった占領ではなく、現地化したヨーロッパ人の仲介者、つまりユーラフリカンを通じて交易に参加し続けたことがわかってくる。

著者ジョージ・E・ブルックス George E. Brooksはすでにポルトガルのアフリカ研究では第一人者であるが、当初、西アフリカを対象として、19世紀におけるアメリカ人による交易をテーマに研究を進めていた。それが次第に時代を遡り、ポルトガルほか、フランスやイギリスの活動を題材にした研究へと発展していったようだ。本書文献目録によれば、1970年には「Yankee Traders, Old Coasters, and African Middlemen: A History of American Legitimate Trade with West Africa in the Nineteen Century.」が手始めに掲載されている。そうしたブルックスの長年の研究成果を総合したものが本書として結実したのである。そのため本書は西アフリカのユーラフリカン全史、あるいは総合研究書といってもよい。したがって、本書には、西アフリカにおけるヨーロッパの活動と現地社会の関連をよりよく検討する上で、教科書的な役割をも果たすことが期待される。

しかしながら、全体史的な叙述や教科書的

な説明は、本書を読み進める障害となりうる。というのも、我々は西アフリカの全体像を知りうるが、個々の事象を読み解くのは、個人の裁量にゆだねられているからである。本稿では、こうした本書の性格上、西アフリカの歴史を叙述するのではなく、ひとつ焦点を絞って紹介したい。

評者が本書において印象的な点を挙げるとすれば、西アフリカにおける女性の地位に関する検討である。本稿では、ユーラフリカンの妻となったアフリカ女性の役割を中心に内容を見ておきたい。その前に以下に本書の構成をしめし、聞きなれない言葉について解説しておく。

第一章　西アフリカ－生態と人文地理
第二章　商業網－ビアファダ－サピ、バニュン－バク、そしてカボヴェルデ－ランサード
第三章　ポルトガル人、ルッソ－アフリカ人、そしてヨーロッパ人の競争者たち
第四章　西アフリカと旱魃、飢餓の時代の始まり、そしてグローバル経済の変容
第五章　セネガンビアのニャラ制度の変化
第六章　カーブ帝国とシエラ・レオネにおける交易
第七章　カーブ帝国との交易とシエラ・レオネ
第八章　第二カシュー会社時代
第九章　セネガンビア　フランコ＝アフリカ人にとって代わるルッソ＝アフリカ人
第十章　ゲバ＝グランデとシエラレオネ－アングロ＝アフリカ人のルッソ＝アフリカ人への挑戦と乗っ取り

まず第二章にある、ビアファダ－サピ、バニュン－バク、そしてカボヴェルデ－ランサードは、大西洋語派のビアファダ Biafadaとサピ Sapi族を指す。また、バユン Byun、バク Bak もそれと同様である。カボヴェルデ Cabo-Verdeは西アフリカにある島の名前で、そこにいた現地化したポルトガル人をカボヴェルデ＝ランサード CaboVerde-lançadoと呼んでいる。ポルトガル人が到来以前、そしてその後も彼らは西アフリカ沿岸部における交易の中心となっていたのである。第三章ではルッソ＝アフリカ人 Luso-africanが聞きなれない言葉ではないだろうか。これはポルトガル人の別名ルジタニア人から来た言葉で、ポルトガル人とアフリカ人の混血ポルトガル＝アフリカ人のことである。第五章にはニャラ制度という言葉がある。ニャラとはクレオール語の妻を示し、力のある現地土侯が外国人が訪れた際、自分の血縁の女性を妻として外国人与える慣習に端を発した制度を指している。第六章、第七章にあるカーブ Kaabu帝国とは、西アフリカの海岸部と内陸の間の交易を支えたマンデ語族による緩やかな連合王国を指す。また、第八章の第二カシュー会社とは、フランスやイギリスの株式会社を模倣してポルトガルが作ったカンパニア・デ・カシュー Campania de Cacheuのことである。ちなみにカシューとは、西アフリカに流れるカシュー河に由来する。

さて、本書の第一章によれば、西アフリカの社会は、大西洋語族とマンデ語族の部族が存在し、1100－1500年の間に起こった乾季を機に同化が進んだとある。内陸のサバナ地域に居住していたマンデ語族が、海岸の伝染病が蔓延していた地域の後退に乗じて、西アフリカ語族が交易していた海岸地域に移住してきたのである。マンデ語族は河川交易、西アフリカ沿岸交易などによって、コーラの実、

マラゲッタ胡椒、海塩などを内陸に運ぶことで利益を得ようとしたのである。その結果、沿岸交易とサハラへ向かうキャラバンが連結し、広域の交易ネットワークが形成された。そのネットワークに、ヨーロッパ勢力として最初に入り込んだのがポルトガル人であった。西アフリカにおける交易を担ったのは、ポルトガル人の中でも、ランサード lançadoであった。ランサードとは他の社会に身をおいた人という意味がある。西アフリカ社会には、交易網だけでなく、地方領主が外国人を受け入れて、もてなす慣習があった。領主は富をもたらす外国人商人らを歓迎し、食料などの援助をしていたのである。しかし、一方で外国人は土地の所有など、生産活動からは除外されていた。したがって、ランサードらも慣習に従って、交易をはじめとした職に従事するほかはなかった。(以上、「第一章」より)

ランサードは次第にポルトガル語で言うところの「Tangomao（棄教者)」になって、完全にアフリカ社会の一員となっていった。その際に、重要な役割を果たしたのが、ポルトガル人に嫁いだアフリカ人の妻たちであった。現地領主が外国人を受け入れる際に、外国人に女性をもあてがうような慣習があったのである。彼女たちは、現地言語、西アフリカ社会についての慣習や文化について、知識のないポルトガル人を補佐した。ガンビア川以南の無首長社会では、女性たちは、配偶者であるランサードが病気あるいは死亡しても、交易を続けることができたし、ときには交易による成功を基盤に指導的な役割を担うこともあった。ブルックスは、ポルトガル人の到来以前には西アフリカ社会において女性が交易に従事する慣習はなく、女性の交易参加をアフリカ交易社会における変化と考えている。また、こうした女性との関係の下に、暮らしたランサード、棄教者、そして彼らと現地女性との間にできた子らを含め、ヨーロッパ風の知識を持ちながらアフリカ社会に暮らす存在を、ポルトガル人ならば、ルッソ＝アフリカン Luso-africanと呼び、ヨーロッパ人全体をユーラフリカン Eurafricanと定義した。(以上、「第二章」より)

16世紀の半ばまで、ポルトガルの独壇場だった西アフリカにやってきたのが、オランダ、フランス、そしてイギリスであった。ルッソ＝アフリカンの交易によって、ポルトガル勢力もこの地域で影響力を維持していたが、他のヨーロッパ勢力から攻撃を受けるようなった。そのころ本国ポルトガルでも、国王セバスティアンがモッロコ遠征の最中失踪し、跡継ぎ問題を機にスペインによって併合されてしまった（1580年)。しかし、ポルトガル本国とは異なり、西アフリカにおけるルッソ＝アフリカン社会は益々、繁栄していくこととなる。

ポルトガル本国の影響の退潮に乗じて勢力を拡大したのは、フランスとイギリスであった。フランスとイギリスの進出は、西アフリカのルッソ＝アフリカンを活気付かせた。フランス・イギリスはポルトガル人がしたように、アフリカ人の妻との関係によって交易の可能性を広げるよりも、ルッソ＝アフリカ人と共棲したからである。共棲の背景には、多くのヨーロッパ人はこのアフリカの地でもヨーロッパ文化、キリスト教的精神を維持することを好んでいたことが挙げられている。

さらにフランスとイギリスの台頭は、彼らの妻であるルッソ＝アフリカ人女性の社会的地位を変化させた。彼女たちは、前述したようにヨーロッパ人の夫の通訳や商売の手助けをしており、ポルトガル人来航以後その地位は夫の補助にとどまっていたように見え

た。前述したように、そうした女性はニャラNharaと呼ばれた。しかし、実際の史料には、アフリカ人女性がヨーロッパ人夫の死後・帰還後、夫から引き継いだ船や家内奴隷を率いて、交易を行ったことが記されているという。しかも、成功するニャラには、何人もの夫がいた者が多く、夫が代わる度にヨーロッパとの交易機会を広げ、繁栄していった。

ニャラの成功で、ニャラの社会的地位も変化したが、現地領主と外国人の相互扶助関係も変化していった。というのも、ニャラが交易のリーダーシップを取ったことで、外国人に対しては如何なる財産も子供に受け継がれないとされた慣習の抜け道ができたのである。ルッソ＝アフリカ人たちは母方の血統にあることを主張し、財産を継承したのだ。(「第五章」より)

18世紀には、ニャラは、ポルトガル語の女性を意味するセニョーラ Senhoraに由来するシナーレ Signareと呼ばれるようになった。しかし、ポルトガル語起源の言葉が現地化している一方で、ポルトガル人の影響力はなくなっていった。西アフリカとヨーロッパの交易の中心が、フランスとイギリスの手に移ったからである。フランスの勢力が強い地域では、この影響が明らかな形を伴って起こった。名前が変わったのである。それまでもルッソ＝アフリカ人と呼ばれる者たちは、ポルトガル名の名前で持って活動していたのだが、フランスが多く居住し、勢力を張るようになると、フランス名を名乗るようになったのである。例えば、MariaはMarieに、PedroはPierreに置き換わった。そのほかにもブルックスは史料から、多くの女性がフランス名を名乗っていた証拠のリストを挙げている。(「第八章」より)

ところで、本稿では『西アフリカのユーラフリカン』の中で、現地妻とも言えるアフリカ人の女性の歴史に触れてきたわけだが、混血女性の観点から見た歴史と意味では、『おてんばコルネリアの戦い』を想起せざるを得ない。『おてんばコルネリアの戦い』はオランダ統治下のインドネシアにおける混血女性の生涯を描いたものだが、社会的地位は西アフリカに酷似している。例えば、オランダ人の現地妻としてポルトガル人の混血娘が非常に好まれていた点や、私貿易を禁じられていた東インド会社の社員が妻の名のもとに商売していた点、また現地の妻たちの中には夫の残した財産を受け継ぎ裕福であった者がいた点など、そのほかにも、細かく挙げればたくさんの類似点がある。しかし残念なことに、昨今こうした混血の研究が東南アジア史の中で論じられることは少ない。なぜならば、近年までの東南アジア史の目的が自律史観、つまり現地語史料を読み込むことで歴史を描き出すことにあったからである。そのため、ヨーロッパ語史料による歴史構築が忌避されてきた。しかしながら、近年、喜ばしいことに『岩波講座 東南アジア史』が2001年から2003年にかけて編まれるなど、日本における東南アジア史もひとつの段階に達したと思われる。したがって、現地史料による研究成果を下に、今後東南アジア史においても関係の深かったヨーロッパ諸国の言語の史料の再評価が行われるに違いない。

また本書『西アフリカのユーラフリカン』を読む中でも、その重要性を再認識させられたのが、西欧諸国のリードオフマンであったポルトガル勢力の活動と影響である。本稿では触れた女性に重点を置いて内容を説明してきたため、深く言及できなかったが、ポルトガル人はルッソ＝アフリカ人として18世紀まで交易活動においてなくてはならない存在で

あった。ある意味でポルトガル人はイギリスやフランスがアフリカに進出するためにインフラを整えたといえる。それはやはり東南アジア、インドでも同様であった。すでに生田滋は『ヨーロッパ世界の拡張』の中に所収されている論文で、「オランダ東インド会社の活動も民間ポルトガル人の存在があって初めて可能になったのではなかろうか」と述べている。ここでいう民間ポルトガル人とは、いわゆるルッソ＝アフリカン Luso-africanに対応するところのルッソ＝アジア人 Luso-asian が含まれる。したがって、評者としては、今後東南アジア史に限らず、インドやヨーロッパ人の広く活動した地域で、女性史も交えて、ルッソ=アジア人などの研究が、現地語史料とヨーロッパ語史料双方からの史料批判の元に生まれることを期待しているのである。

参考資料

生田　滋「インド洋貿易圏におけるポルトガル人の活動とその影響」、生田滋・岡倉登志編『ヨーロッパ世界の拡張－東西交易から植民地支配へ』2001、世界思想社

池端雪浦ほか編、『岩波講座　東南アジア史』第１～９巻＋別巻、2001～2003、岩波書店

レオナルド・ブリュセイ、栗原福也訳『おてんばコルネリアの戦い-17世紀バタヴィアの日蘭混血女性の生涯』1988、平凡社

亀井孝ほか編『世界言語編』言語学大辞典シリーズ　1988、三省堂

D.T.ニアス編、『12世紀から16世紀までのアフリカ』ユネスコ・アフリカの歴史　日本語版　第四巻、1992、同朋社

Artur Teodoro de Matos, Luis Filipe F.Reis Tomaz, *Vinte anos de Historigrafia Ultramrinha Portugesa 1972-1992,* 1993, Comissão Nacional para as Comemorações dos Descobrimentos Portugueses, Lisboa.

Bailey W. Diffie and George D. Winius, *Foundation of the Portuguese Empire 1415-1580 –Europe and the World in the Age of Expansion vol.I,* 1977, University of Minnesota Press/Oxford University Press.

David Birmingam, "Upper and Lower Guinea", *The Cambridge History of Africa 3,* pp.463-518, 1977, Cambridge.